

学 位 論 文 要 旨

氏 名 奥井 一 幾

地域資源を活用したNonformal Educationプログラムの開発
題 目 -学校・地域間連携に関する概念検討を基盤として-

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

【序章】：学校が地域に対して開放的であり、地域との質の高い連携（以下「学地連携」と記す）を実現することが指摘されてから久しい。序章では、まず、学地連携に関する先行研究レビューから総論を述べ、本研究における問題の所在として以下の3点を設定した。

- 問題① 学地連携に関する概念検討が不十分であること
- 問題② 質的研究に偏る傾向が強く量的研究が不足していること
- 問題③ 学地連携に関する議論の主体が「学校」である場合が多く、「地域」は従属的位置づけで捉えられていること

また、これらの諸問題に対応づける形で、本研究における目的として以下の3点を設定した。

- 目的① 学地連携に関する概念検討を行うこと
- 目的② 質的及び量的研究の視点から学地連携の現状及び評価の検討を行い今後の課題を明らかにすること
- 目的③ 地域主体型学地連携の実践及び評価の検討を行うこと

【第1章】：「目的①」に基づき、学地連携の概念検討を行った。具体的には、まず、これまでの学地連携に関する研究動向について、「表層的理論：どのように連携するか」に関する内容は多く見受けられたが、「基盤的理論：なぜ連携を行うか」に関する内容は僅かであったことを指摘した。ゆえに、本研究では、学地連携の「基盤的理論」に焦点化し、主に、「発達論」「教育論」「地域論」の観点から先行研究を概観した（これらの領域を設定した前提として「子どもの“発達”をどのように捉え、その発達をどのような“教育”により促し、これらのプロセスをどこ“地域”で展開するか」という、学地連携を捉える際の論理が仮定されている）。それぞれ、発達論では「発達論の理論系譜と今日の発達観」を、教育論では「教育の定義と機能的分類」を、地域論では「地域の定義と内発的発展論」を中心に論じた。この中で、「教育論」における知見からは、本研究のNonformal Educationプログラムに関する領域的位置づけについても明らかにした。最終的に、得られた知見を発展的に捉え、本研究全体で一貫して用いる概念モデル「CCDモデル：Child-Centered Development Model」を提案した。CCDモデルは、同心円型入れ子構造の中心に、発達しつつある人間（子ども）を据え、時間軸の中で動的に子どもの発達を捉えた概念モデルである。

【第2章】：「目的②」に基づき、「学地連携評価アンケート」による属性や校区別における評価の差や傾向性について検討した。調査対象は、新潟県上越市内の公立小学校（3校区）の住民（166名）及び保護者（233名）であった。調査項目は、「学地連携評定尺度（小泉，2000）」、「学校支援の希望（岩崎ら，2011）」、「学校教育への期待」、「学地連携関連制度の認知度」であり、校区ごとに住民と保護者を対応づけたデータサンプリングを行った。まず、「学地連携評定尺度」について、確認的因子分析を行った結果、先行研究同様、3因子（「人的交流」、「参加性」、「開放性」）が得られ、「良好」とされる適合度が確認された（GFI=0.941，CFI=0.937，RMSEA=0.058）。次に、この3因子について、2要因（属性×校区）分散分析を行った結果「人的交流」で有意な交互作用が示された（ $p < 0.01$ ）。また、階層的クラスター分析の結果、「学校支援の希望」や「学校教育への期待」において、住民及び保護者間に様々な傾向性が確認された。「学地連携関連制度の認知度」については「放課後児童クラブ」が高い他は、全体的に低い傾向等が示された。

【第3章】：「目的③」に基づき、Nonformal Education領域における地域資源を活用した実践プログラムを行い、その関与者から得られた自由記述分析によってプログラム評価を行った。調査は、全体を1次及び2次調査に分け、1次調査は子どものみ（19名）を、2次調査は子ども（17名）、保護者（9名）、教員（11名）を対象として、それぞれから得られた自由記述アンケート結果を評価指標とした。その結果、1次調査では、「遊び」や「勉強」というメリハリのある活動が、双方の内容の充実度を高めていたことや、学年別による活動嗜好性等が明らかになった。また、2次調査では、子どもに様々な「体験」をさせることに価値を見出す大人側の意向や、子どもを中心として、保護者や教員がそれぞれの立場から本実践を肯定的に捉えていたこと等、テキストデータから属性的特徴が現れ、対応分析によってこのような3者関係が可視化された。さらに、「参加型評価（源，2007）」の観点から取り組んだ本実践の質的分析によって、同一プログラムの地域間比較や、縦断的データ分析へ適用可能性が考察され、今後の新たな研究展開と理論発展の方向性が見出された。

【終章】：終章では、本論第2及び第3章の結果をCCDモデル上で捉え直し、双方の結果を総合的に考察した。また、研究全体における成果と課題を明らかにして、今後の展望について述べた。本研究への批判的な立場から、学地連携を扱った研究分野が一層の発展を遂げることに期待したい。

(以上1,979字)